



法人広報誌



第 41 号

令和 7 年 11 月 30 日

発 行 者

社会福祉法人 つどいの家

理 事 長 佐 藤 清

〒984-0838 仙台市若林区

上飯田一丁目 17-58

TEL 022 (781) 1571

FAX 022 (781) 1573

<https://www.tsudoinoie.or.jp>

特集：自己実現とは…



サンドイッチマンに会いたい
～楽天球場へ～



大好きな相撲鑑賞
～大相撲仙台場所へ～



グループホームで
～ランチドライブ～

特集 自己実現とは

P2 理事長あいさつ

P3-4 自己実現エピソード

P5 職員の自己実現

P6-10 自己実現とは～管理者対談

P11 地域交流 夏まつり

P12 連載

企業の社会貢献活動との連携

～戦後80年、昭和100年の年の終わりに～

理事長 佐藤 清



今年も暑い日が続いていたと思ったら急に平年値を下回る日々となり、身体がついていけない思いをしています。時の過ぎるのが早く感じられ、気が付けば戦後80年、昭和100年の年が終わろうとしています。大切な節目の年であったはずなのに、振り返ってみてもあまり記憶に残ることがないように感じられてなりません。

そんな中、「戦後80年に寄せて」と題する内閣総理大臣所感が発せられたことは大切なことだと思います。所感には、「なぜあの戦争を避けることができなかったのか」、「無責任なポピュリズムに屈しない、大勢に流されない政治家としての矜持と責任感を持たなければなりません」、「冷静で合理的な判断よりも精神的・情緒的な判断が重視されてしまうことにより、国の進むべき進路を誤った歴史を繰り返してはなりません」、「我々は常に歴史の前に謙虚であるべきであり、教訓を深く胸に刻まなければなりません。」などと記されています。1930年代、深刻な不況を背景としてナショナリズムが昂揚し、日本においてもドイツ、イタリアと同様、歯切れ良く勇ましい言葉にひかれ、メディアが煽り、世の中が流されていきました。戦争を記憶する人々が年々少なくなり、ジャーナリズムの退潮と反比例してSNS上での真偽不明な情報も拡大し、無責任に煽ることで収益化しようとする人すら出現している現状を見るにつけ、世論の暴走が起きないか、少なくとも戦後100年を迎えることができるのだろうか一抹の不安も感じます。

また、学校法人立命館が、最後の元老西園寺公望自筆の「第二次教育勅語草案」を初めて一般公開したという報道もありました。草案には、外国人を蔑視して日本を特別視するのではなく、国際協調を基盤とした社会を築くべきとの趣旨が説かれているとのこと。西園寺本人が体調を

崩し文部大臣を辞任したため成案にはならなかったということですが、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と謳った勅語がどう変わっていたのだろうと思ってしまいます。いずれにしても、技能実習や入管難民施策の現状があるにもかかわらず、殊更に外国人が優遇されていると喧伝する内向き志向、排外主義的傾向の拡がり懸念される今、軍国主義の時代に国際協調を主張した西園寺等の政治家が考えていたことを学ぶことは意義のあることと改めて思います。

外国人排斥や少数者に対する偏見など差別の温床になりかねない空気感も漂う中、今号の広報誌「つどい」は、しょうがいのある方が、地域の中で自分らしく生きることを目指す気持ちを支え、可能性を発揮できるよう様々な工夫をこらしながら取り組んだいくつかの事例を紹介するなど、「自己実現」をテーマとしました。

支援の現場では、時には手探りで、ご本人の気持ちを把握し、思いを引き出し、具体の活動に繋げられるよう日々取り組んでいます。人手も時間も必要な取り組みですが、これこそがつどいの家たる所以と自らを鼓舞しながら職員みんなで行ってみたいと思います。

巷間、日経平均株価が史上最高値とか近年にない賃上げなどと伝えられていますが、実感を伴うものではないと思います。賃上げされるも物価高に追いつかずといったところが一般的なのかもしれませんが、公定価格で運営する医療、福祉、介護の分野では、少しの賃上げにも苦勞している現状があります。三年に一度の微々たる改定で間に合うはずがありません。人材確保の困難さなど事業運営の実態や生活実感に即した何らかの手当てが講じられる予算措置を夢見つつ、できる努力を重ねながら年越しを迎えたいと思っています。

自己実現エピソード

『安藤さんの推し活』

安藤一真さんの生きがいは、大好きな歌手の島津亜矢さんを応援することです。コペルでの音楽活動だけでなく、日常の様々な場面で島津さんを熱く語ってくれます。実際にコンサートにも足を運んでおり、後援会にも加入しています。そんな安藤さんに推し活の話を伺いました。

質問：始めて島津亜矢さんを知ったきっかけは何ですか。

安藤さん：「テレビ番組で一般の人が歌っている曲を聴いて、いい歌だなと思って。お母さんに調べてもらったら島津亜矢さんの「感謝状～母へのメッセージ」だったんだよね。」

質問：初めてコンサートに行ったのはいつですか。

安藤さん：「2018年の仙台公演をヘルパーと行きました。それから毎年コンサートに行っているうちに隣の車いす席に千葉から来ている亜矢友さん（ファンの通称）と仲良くなってさ。その後、後援会に入り、はんてんを着てピカ棒を振ってずっと応援している。グッズも増えて嬉しい。」

質問：実際に島津さんに会ってみてどうでしたか。

安藤さん：「ステージでは着物を着ているけど、実際に近くであった時はまた違う。可愛かった。」

質問：島津さんに会ってから一真さんの中で変わったことは何ですか。

安藤さん：「亜矢友さんと繋がれたこと。食事に

行ったり、亜矢さんの話ができる事。」

質問：お母様から見ても一真さんの変化はありますか。

母：息抜きが出来るようになった事。それまでは「コペル（通所）に行かなきゃ、お仕事（作業）しに行かなきゃ」と気を張ってばかりいたけど、「推し活なら休んでもいいか」と自分の為に休みを使えるようになった事が大きく変わった事です。

安藤さんは推し活を楽しむことで、しょうがいの有無に関わらず、自分自身を大切にしている時間が持っていることが分かりました。小さな挑戦や楽しみが、自己実現のきっかけになるのですね。

つどいの家・コペル職員 高橋あかね



『森岡さんの思い』

森岡波留巳さんは食べることが大好きです。支援目標は「食事を楽しみたい。スイーツなど好きな物を食べたい」でした。甘いものには目がなく、チョコレートのシフォンケーキを驚嘆みでモグモグ食べる姿がとても印象的でした。

しかし、令和6年4月体調の変化により医療的ケアが必要になりました。食べることが全くできなくなった訳ではありませんが、術後しばらくは痰の量も多く、ドクターからは口から食事を摂ることで、誤嚥に繋がることもあるので無理はしないようにとの助言がありました。

環境や体調が落ち着いたところで、活動の中で食べる機会を設けることができました。メニューは、コペルの畑で採れたスイカです。はじめは嫌がり、顔を背けて口を開こうとしませ

んでした。何度か促し一口食べると、今度は催促するように口を開け、「もっと食べたい」と訴えるような表情の波留巳さん。さらに一口食べると満足げな表情でスイカを味わっていました。

大好きな、「食べる」ということを改めて経験し「経管栄養になっても食べられるんだ」という、気づきと喜びが波留巳さんの表情から感じ取ることができました。そのような波留巳さんの様子から、人から与えられるのではなく、自分の意志で自分の思いを成し遂げる「自己実現」の大切さを改めて実感しました。

その時のことを振り返り、話をする職員の傍らには、満足げに頷く波留巳さんの姿がありました。

つどいの家・コペル職員 三浦 菜美子

『伊勢さんの食の体験』

「ともさん！おはよう！」この一言から、水曜日の私たちヘルパーとの一日が始まります。友博さんは、お話をすることができず、自分で自由に体を動かすことができません。気管を切開し、胃ろうという胃にあけた穴から直接栄養を補給しています。ただ、少量であれば、口から食べ物を摂取できます。そのため、私たちは食の楽しみを感じることを忘れないように支援しています。

ヘルパーたちのふとした会話の中で話題に出た「カレーメシ」。体に良いか悪いかは別として、友博さんは食べたことがあるのか？そんな疑問があり、ご家族に確認。食べたことがないことが判明し、みんなで食べてみよう！と準備をしました。食べやすいようにペーストに近い状態にして、いざ実食！口に入れると、不思議な表情をする友博さん。そうなので

です。友博さんは表情、口の動き、飲み込み具合で自分を表現しています。これまでも確実に好きなことを伝えてくれたのは、アイスクリームです。冷たさもありますが、飲み込みが早く、表情が良いのです。サーティーワンのポッピングシャワー味のアイスを食べた時は、口の中からパチパチと音が鳴り、またまた不思議な表情。初体験だったのでしょうか。

今後おいしい物探しの冒険をしていきましょうね、それでは、また水曜日～！

ぺんたす職員 今野 竜佑



『菊地さんの作品展』

菊地愛子さんは、夏に「アマビエ展」秋に「バンバル展」という作品展を開催しております。愛子さんは、アマビエ・猫・ちょっぴり懐かしいレトロな風景が大好きで、それらを形にした作品を作成し展示しています。県北のお寺の写真を撮りに行ったり、最近では、樹脂粘土を使ってミニチュアドールハウスを作成しています。

愛子さんが展示会を始めたきっかけは、「職員や周りの人に認められたい」という気持ちからでした。当初は、つどいの家の館内で小さく開かれていましたが、「より多くの方に作品を観てもらいたい」という願いから、2023 年秋よりイオン幸町店様にご協力いただき、展示スペースをお借りして、地域の中で開催することができるようになりました。

愛子さんにとって、ただ作品を観てもらうだけではなく、作品を通して、地域の方と繋がることが出来るのも喜びでした。また、つどいの家の関係者という枠を超えたお友達ができ、「作品展楽しみにしているよ」という嬉しいお言葉もいただくようになりました。

学生の方がアマビエ展をきっかけにつどいの家を知り、就職に繋がったというケースもあります。

愛子さんの夢の形は現在も変化していて、今は「メディアテークや、電力ホールで作品展を開催し、より多くの人に観てもらいたい」という目標があります。

大きな会場で作品展を開催するには、まだまだ道半ばだと思いますが、これからも作品を通して、愛子さんにとっての沢山の素敵な繋がりが出来ると嬉しいです。

仙台つどいの家職員 松原 聡太



職員の自己実現

～ぺんたす職員 長沢 ひかり～

自己実現とは何かを考えるにあたって、まずは、入職のきっかけや理想の支援者像について振り返ってみることにしました。私は、小さい頃からコミュニケーションに苦手意識があり、つどいの家への入職を通して何か少しでも変われたらいいなという希望を持っていました。

初めは利用者さんとうどう接したらよいか分からず、先輩の真似をすることで精一杯でしたが、利用者さんに関わる中でたくさんの気づきがありました。

それは、利用者さんも色々な思いを持っていて、表情や目の動き、体の動きなどで表現しているということです。一方で、日々の生活の中で何か伝えたいことがあっても「うまく伝わらない」、「気づいてもらえない」そんな経験もたくさんしているのでは？ということにも気づかされました。「利用者さんが今どんな想いでいるのか」を読み取るのが難しいことも多く、すごく悔しい気持ちになることもあります。利用者さんの想いに気づき、それに応えることができた時はなんとも言えない嬉しさがあり、すごく尊い時間を過ごさせてもらっているなと感じます。そんな経験を通して私は、利用者さんからコミュニケーションの楽しさ

を教わったのだと思います。

つどいの家に入職し、ヘルパー歴も4年目になりますが、コミュニケーションを楽しめるようになることが私にとっての自己実現であり、これからも利用者さんの思いをくみ取り、それにきちんと応えられる支援者を目指していきたいです。



～つどいの家・コペル職員 三塚 柊人～

私にとっての自己実現とは、「人それぞれの生活を形作るパーツの一つ」だと考えます。福祉事業所で働く以上は必要不可欠である自己実現という考え方ですが、この単語を聞くと「好きな場所に行く、食べたいものを食べる」という印象で捉えてしまいがちだと思います。しかし日常生活の様々な場面にも自己実現はあると私は考えます。

例えば、私は映画を見ることが好きなのですが、見た映画の感想を映画専門のアプリで投稿をしています。このように周囲の意見を気にすることなく、自分が感じたことを文章に記すことも、私にとっては自己実現の一つです。

また、私事ではありますが今年入籍をいたしました。実家を出てパートナーと二人で暮らしているわけですが、やはり各家庭独自のルールがあり意見がぶつかることもありました。その都度二人で話し合い、この先どうしていくのか方針を決めました。話し合いを通し、これからの生活様式を決めてきましたが、人と何かを決める過程を通して私は自己実現できたと感じています。パートナーと住む家を決めること、どの家具を配置する

のか悩むこと等、これらを通して私は生活の中で自己を実現しています。

大きい小さいにかかわらず、自己を実現する機会はありふれているのだと思います。何かを達成することだけではなく、どのおかずから食べるのか、どの道を通るのか等、様々な過程の積み重ねがその人の生活を彩る自己実現につながっていると考えます。たくさんの自己実現の上で私の生活は形成されているのだと思います。



自己実現とは

～管理者対談

日中活動支援事業部の管理者で「自己実現」について対談をしました。

司会：本日は時間をいただきましてありがとうございます。今回、広報誌「つどい」のテーマが「自己実現」です。私たちは、基本理念に「どんなに重いしょうがいのある人も」というくだりから始まって、最後に「自己実現の場を保証し支援すること」と掲げています。

昨今の差別的な発言や、外国人排斥といったマイノリティに対する人々の理解の希薄化は、偏見に繋がりがかねないような印象すら感じています。このような状況の中で、しょうがいのある方がこの地域の中で、生き生きと豊かな生活を送っていくために、我々自身どういった活動が必要なのかを改めて考える機会になればと考えています。

まず、事前にヒアリングしたエピソードの概要についてお話しいたします。その後、これらのエピソードを深掘りしながら、テーマである「自己実現とは？」というところを含めて議論したいと思います。

各事業所のエピソード紹介

1. つどいの家・アプリ：二十歳の旅行

司会：では早速ですが、まずアプリのエピソード「二十歳の旅行」について、概要をお願いできますでしょうか。

大累：グループを担当している職員からコロナ禍で修学旅行（卒業旅行）に行けなかった利用者がいると聞いたことがきっかけでした。人生の中で小中学校、高校の修学旅行は大きなイベントだと思いますが、それができなかったという話を聞き、「修学旅行を実現させてあげたい」との思いで提案をし、企画しました。成人式は、式典としてアプリ全体で取り組んでいますが、今回は「二十歳を祝う旅」として、ご本人とご家族に提案してスタートしました。本人たちが行ってみたい場所を選び、最終的には東京ディズニーランドと大宮にある鉄道博物館になりました。参加者は、藤嶋希歩さんと千葉晶太さんのお二人、それぞれのお母さん、職員が男女一人ずつの合計 6 名で 1 泊 2 日の旅行でした。

晶太さんは、子どもの頃に家族旅行でディズニーランドに出かけた時、門の前から動けなかった経験があると伺っていましたが、今回は一緒に入ることができて良かったと話していました。希歩さんは、少し不安なことがあって泣いてしまうこともあったようですが、お母さんやアプリ職員とディズニーランドのアトラクションを楽しめて、よい思い出になったと思います。職員はお母さんたちと一緒にいられたことが安心でしたし、お母さんたちは子ども時代に行ったところへまさか大人になってからも一緒にいけるなどと思っていなかったのが良かったという話が印象でした。また、旅行先でビデオ通話をしながら、アプリの利用者職員みんなとお祝いすることもできたので、とても良かったです。

二十歳記念は、式典に限らず、ご本人



たちが選択できるような場を作り出せるよう、今年度は「二十歳のコンサート」として企画しています。

司会：ありがとうございます。この旅行の後、ご本人に何か変化は見られましたか？

大累：根拠はないのですが、てんかん発作の回数は明らかに減ったように思えます。できる限り、本人の思いに寄り添い、行動を制限することなく活動に取り組むことで、ご本人も一生懸命自分の思いを伝えてくれているように思いますし、今回の旅行を通じて本人と職員間の関係性も高まり、自己実現や自信につながったのかもしれない。

2. 仙台つどいの家：夏海さん、トントン

山口：夏海さんは通所 4 年目です。入所したばかりの頃は明るい方でしたが、大人しい印象で、あまり主張しないタイプでした。職員は本人の気持ちや意思を引き出したいと考え、一つ一つ聞いて返事を待ち、それを実現していくという流れを作っていました。

彼女は一人っ子なので、ご両親が先回りをしてやってくれる環境だったため、主張する必要がなかった背景があるのかもしれない。伝えると実現するという経験を重ねる中で、自己が出てきたのです。

「トントン」というのは、相手の手をトントンしたり、肩をトントンしたりして、イエス／やりたい、という意味を表現してくれるようになったということです。

司会：なるほど。そのトントンで意思表示ができるようになるまで、どのくらいの時間がかかったのですか？

山口：最初の 1 年間は本当にわからなかったです。でも、思いを実現して、どうだったかという経験…良かった、いまいちだった、などを重ねていく中で、本人がどんどん意思を出してくるようになったと感じます。

司会：現場の職員さんは、言葉がないご本人の意思に繋げるために、どのような工夫をされているのでしょうか？

山口：我々の仕事は、わからないからこそ想像し、それを一緒にやってみるものの積み重ねだと思っています。今、こう思っているのかなと、こちらが言語化して本人に伝えてあげると、そこにイエス・ノーが出てきて伝わるようになるのです。職員が丁寧にそういった取り組みをしてくれているから、トントンなどで明確に返せるようになり、今では複数の選択肢から選べるようになっています。

3. 八木山つどいの家：クラブ活動、写真・詩文集の展示会

司会：続いて、八木山からはクラブ活動や写真展についてお話を伺っていました。取り組みの概要をお願いします。

高杉：はい。利用者さんたちがやってみたいことなどを、月 1 回程度のクラブ活動として展開していました。その中で、写真や、その時の気持ち・感情を言葉にした「詩」などを様々な形で表現しました。これまで、施設内での展示はしていましたが、利用者さんたちに「ゴールは、何？」と聞いたところ、「みんなに見せたい」という言葉がありました。そこで、ご家族の協力を得て、写真展を開催したという経緯です。

展示の際、ご本人の感情（ポジティブな気持ちやネガティブな気持ちも全て）をしっかりと

葉にして確認し合いながら、展示作品を選んでいきました。

展示会場では、保護者の方々との交流や、地域の方（来場したおじいちゃん、おばあちゃんなど）に、「この写真私が撮ったんだけどどう？」などと話しかけるなど、物怖じせずに初対面の方と話す場面が多く見られました。

全て終わった後に確認したところ、やはり「もう一度やりたい」という声や、自分が撮った写真が額に飾られていることでの達成感や喜びがあったという話がありました。

司会：来場者数が多かったそうですね。

高杉：電力ビルでの展示でしたので、見に来た方はトータルで 600 名ぐらい来ていると思います。

司会：来場者からはどのような感想がありましたか？

高杉：写真に関しては、「これどこで撮ったの？」「なんでこの視点なの？」という質問がありました。詩に関しては、「ああ、こういう風に考えてるんだね」と、人それぞれの価値観の違いを感じる事ができる感想が多かったです。

職員側も、写真の傾向から、本人の普段の目線の向きや微妙な角度が分かり、関わりのヒントになっています。本人にとって伝わる経験になっているだけでなく、職員側もどう関わっていくかのヒントを得て、お互いが成長している活動だと感じています。

司会：自分の表現を形にして、それが周囲から反響を得て認められた時に、ご本人の気持ちの変化や成長につながっていくということでしょうか。

高杉：そうですね。利用者さんたちから「今度は例えば花が撮りたい」「何々が撮りたい」という意欲が出てくるので、「やりたい気持ち」が展示会を通じて出てきたと感じています。

4. つどいの家・コペル：デザインの考案

司会：続いてコペルのエピソード、パン工房でのデザイン考案についてお願いします。

佐々木：はい。以前からパン工房のキャラクター「ピースちゃん」があったのですが、理事長からプレゼント用のマフィンとクッキーを包んでほしいという注文があり、このキャラクターを使った袋を作ったのがきっかけでした。

利用者に絵を描くのが好きな方がいらっしゃったので、その方の書いた絵も袋にしてみようという話になり、Aさんが作成したデザインで試作しました。

それを見た他の利用者さんも、「俺も書いてみたい」「私も書きたい」という話になり、今やパン工房内では、パン作りだけでなく、袋作りも作業の一環として取り組み、一大ムーブメントになっています。

特に、Aさんは以前、パン工房内での集中があまりできていなかった背景がありましたが、この



取り組みを通じて、自分の能力（絵が好きというところ）が形になったことで、「自分はパンを作る役割なんだ」という働く意識が高まりました。

司会：実際に商品化されたデザインを見たお客さんの反応はどうでしたか？

佐々木：学生さんなどからは「可愛い」という言葉を直接聞くことができ、販売していた利用者さんも喜びました。職員が「誰々さんの作った袋が人気だったよ」と伝えることで、本人は表情で「また作ろう」という意欲を示していました。その活動を受けて、「俺もやりたい」という周りの利用者にも影響を与えています。

5. 若林障害者福祉センター：コミュニケーションブック

司会：若林障害者福祉センターでのエピソードをお願いします。

小原：はい。以前通っていた事業所を職員体制の事情で辞めてしまった医療的ケアが必要な方がいらっしゃいました。その方は、通所時に家を出る瞬間からずっと泣いていて、我々には当初、泣いているという意思表示しか分からなかったのです。

そこで、まずコミュニケーションブックを作ってみようということで取り組みました。職員が、本人の口元の歪み具合、胸の張り具合、手の動きなどで、「いいよ」「ダメだよ」「私もしたい」「負けたくない」といった感情を推測する段階から始めました。

一方的なコミュニケーションではなく、お互いに「こうだよ、そうだよね」というやり取りをした上で、ご家族にも確認を取り、コミュニケーションブックが完成しました。職員たちは、ご本人の今の気持ちが「だいぶわかるよ」という状態になってきています。周囲の職員が自分の気持ちを受け取ってくれたというところから、自己実現に繋がっていくのかなと感じました。

司会：泣いているという一つだけの表情でも、口元の動き一つ、胸の動き一つで、ご本人の意思表示を捉えるというのは、非常に大切な視点ですね。

自己実現とは何か

司会：ここまでのエピソードを伺って、ご本人さんの意思を大事にしながら、それを支援につなげていくために、支援の現場で様々な工夫や努力が行われていることが感じ取れました。そもそも、「自己実現とはなんだろう？」ということ、改めて皆さんにお伺いしたいのですが。

一つポイントとして、「希望を叶えること」と「自己実現」はそもそも違うというところがあると思います。単に本人の希望を叶えていることが自己実現だ、という捉え方で間違ってしまうのは避けたいです。

佐々木：恥ずかしい話、自己実現の話となった時に、正直ピンとこなかったのです。皆さんの話を聞いて、自己実現は「階段」のようなイメージなのかなという印象を受けました。心理的安全性、共感、自己主張、継続といったものが重なった上で、ご本人や自分自身を後押しする、そういう階段を登っていった先に見えてくるもの、というイメージです。

高杉：自己実現には、やっぱり誰かが必要なのだ、と感じました。一人ではできない部分もあるし、自分のこと、本当の自分を気づかせてもらえる存在が必要です。共感したり、背中を押してくれ

たり、支えてくれる存在が土台となって、やりたいことに気づかせてくれることが、自己実現につながっていくのかな、と思います。

司会：自己満足ではない、ということですね。

高杉：遊びに行くといった個人的な自己満足ではなく、社会とのつながりや他者とのつながりに気づくことによって、自己実現となっている部分もあるのかと思います。

小原：エピソードで話した方も、以前より自己主張をするようになっていたので、高杉さんが話した「共感」ということなのかと思いました。

大累：支援の現場をやっていた頃は、「なんでこの時代に生まれたのだろう」ということをみんなで一緒に考えて、「今やるべきことってなんだろう」「生きづらさとは何だろう」という話をしながら活動を考えていました。ご本人の存在意義を理解し深く捉え、尊厳を最大限に尊重するところが、我々の基本理念とも通じる重要な点だと改めて思います。

山口：我々の意識からも薄れがちになっている部分があるかもしれません。理念に「自己実現の場を保証し支援すること」と入れているのは、非常に難しいことだけれども、そこを大事にしていこうねというメッセージであり日々意識し確認していかなければと思います。高杉さんが言ったように、一人ではできないこと、お互いにというところが大きい。この仕事は、利用者さんの自己実現を実現していく営みによって、自分自身も自己実現しているから続けられるのだろうと思います。

読者へのメッセージ

司会：最後に、広報誌の読者、つまり社会に向けてのメッセージをいただきたいと思います。地域共生社会を考えた時、読者側は、しょうがいのある方の存在を深く捉え、共に自己実現の場を保証していくために、どのような行動につながれると良いでしょうか？

山口：自己実現は、何かもっと得体の知れないものではないかと捉えられがちです。ですが、エピソードは日々何百点も生まれているわけです。あまり特別なものと思わずに、しょうがいがあってもなくても、日々の営みは変わらないというところから入ってもらえると良いのではないのでしょうか。

司会：決して特別な存在ではないということですね。しょうがいの有無に関わらず、一人の人間として当たり前、共に関わりを持つことがまず大事な姿勢であると。そういったことで、この社会の一員として共に関わっていきましょう、というところが、一つのメッセージでしょうか。

一同：ありがとうございました。

対談者 山口 収・大累 貴司・高杉 和豊
佐々木 健・小原 弥生
司 会 佐藤 吉久



「コペル夏まつり」

コロナ禍で開催できなかった時期を乗り越え、6年ぶりに上飯田第一町内会との共催という形で8月9日（土）「夏祭り」を実施しました。

当初、昨年同様施設のみで開催しようと考えていましたが、町内会長さんから一緒にやりませんか？とのお声がけをいただき、何度も打ち合わせを重ね無事開催することができました。

「町内の子供たちに夏の思い出を作ってあげたい」という会長さんの思いに共感し、地域住民と施設の利用者が一緒に祭りを楽しんでいる姿が、子どもたちが大人になった時に、「しょうがい理解」を広げていく「種まき」に繋がると思うので、期待が膨らみました。

祭り当日は、上飯田地域にこんなに人がいるのか！と驚くほどの来場者でした。久しぶりに開催される夏祭りを皆、心待ちにしていたのでしよう。

「沖野すずめ隊」による演舞やパン食い競争に挑む子供たちの姿に、参加した近隣の保育園児・施設利用者・地域住民みんなで大いに盛り上がりました。

楽しいときの笑顔は、みんな同じ！！「楽しい時間を一緒に楽しむ」ということが、お互いを知るきっかけになることを感じました。

ただ、「種まき」は継続して長く続けていくことが大切だと思います。大きな行事だけではなく、日々の関わり合いこそが大切だと思いますので、「一緒に楽しむ」ことを続けていきたいと強く思いました。

つどいの家・コペル 菊地 昌子



「つどいの家夏まつり」

仙台つどいの家は、毎年8月に夏まつりを開催しています。この夏まつりは、仙台つどいの家の利用者・職員、そして地域の皆様と一緒に作っています。

たくさんの方にお越しいただくためチラシとポスターを作製し、地域のお店や住宅に利用者さんと一緒に赴き、ポスティングやポスターの掲示のお願いをしています。ボランティアも、大学や地域のボランティア団体に声を掛け、今年度は18名のボランティアさんが参加してくださいました。

ステージでは、和太鼓やチアリーダー、よさこいなど様々なジャンルの団体に声を掛け、出演していただいています。地域の中学校の吹奏楽部さんからは「コロナ禍以降イベント等で演奏する機会が減ってしまっていたので、声をかけてもらえて嬉しい」というお話もいただきました。

また、昨年度から実施している抽選会では、

日頃お世話になっているお店などから協賛品をいただき、景品の一部とさせていただいています。これは長年募金箱を置かせていただいたり、広報誌を毎回届けに行くなど、日々の関わりの積み重ねで成り立つことだと感じています。日頃からの地域との結びつきの大切さを改めて実感することでもあります。

こうして迎える夏まつりは、毎年小さなお子様から年配の方々まで、たくさんの方々にお越しいただいています。利用者さんも地域の方々も混ざって一緒に夏まつりを楽しむ姿は、法人の理念でもある「地域でいきいきと暮らす」を体現しているようで、見ていて嬉しい気持ちになります。これからも地域とのつながりを大切にしながら、みんなで夏まつりを盛り上げていけたらと思います。

仙台つどいの家 大竹 穂香



株式会社 アルファス計装
代表取締役 鈴木 昭博 様

仙台市若林区沖野に本社を構える「アルファス計装」代表取締役の鈴木様に社会貢献活動についてお話を伺いました。当法人にも多大なご寄附をいただき、楽天イーグルスの試合への招待もいただいています。

～はじめにクワガタについて～

2000年から10年くらい自宅の庭に専用のハウスを構えて多い時には800匹飼育していました。和名はオオシカクワガタといって、インドやネパールの山岳地、標高3000mほどのところに生息しています。2000年に輸入解禁となり、毎年飼育続けて5年かけて、卵が採れました。そこから成虫になるまで2年、うまく大きく育ったクワガタをブリードギネスに申請し登録されました。難しいことに挑戦するのが好きで、突き詰める性格です。虫の気持ちになって考えたりしました。

始めは温湿度・空調を一定にすることに必死になり、様々な木も買って試しました。しかし、自然界は一定ではないと気づき、温度差を付けるという逆転の発想に至りました。会社を始めて最初の2年はクワガタを飼育する時間が唯一、仕事を離れて没頭できる時間でしたので、「クワガタさま」で、社屋につけました。テレビCMにも登場、人と違う事をやりたいという気持ちもあります。自分がここまでしたことは人に語れることになりますから。

・2018年、つどいの家・コペルで設備修繕などの寄付募集をしていた際に多大なご寄附をいただきました。法人を知っていただき、寄付をしようと思っていたいただききっかけをお聞かせください。

コペルの近くに住んでいたもので、存在を知っていたんです。夏まつりをやっているなあと、毎朝通われてくる人たちの姿も見えていました。会社近くのGHの人たちの姿もみかけます。「できることはやろう」という思いです。法人運営は大変なんだろうなあと、自分も経営者なのでわかるという気持ちもあります。



・私たち法人以外にも、支援をしているところがありますか？

個人的に毎年寄付しているところがあります。楽天イーグルスのドリームシートは20年くらい行っていて、毎試合、福祉施設や少年野球の子供たちなどを招待しています。それをきっかけに繋がった児童養護施設のお子さんからのお礼の手紙をもらって、野球が好きだということがわかったので、グローブとバットとボール・大谷選手の本・クワガタの本を昨年送りました。

あとは、ふるさと企業納税で大規模山林火災被害のあった大船渡市を支援して大船渡市の企業アンバサダーを1年任命されています。幼いころに住んでいたところに近い名取市にもふるさと企業納税をしました。子供のころ閑上で遊んでいたもので、昨年事務所を構えた北海道の千歳市も支援しました。

・鈴木様の活動をみている社員さんにはどのようにみえているのでしょうか？

どうでしょうね？長年やっていることなので。

・今後の社会貢献活動についての思いをお聞かせください。

身近なところで普通にできることをずっと続けていて、仙台のお祭り（たなばた・よさこい・光のページェント・青葉まつり）に毎年寄付をしています。

今やっていることをずっと続けていきたいと思っています。

あとがき

社員さんを大切に思われ、またそのご家族をも大切にしている鈴木様の温かさを感じるお話もありました。「地域を大切に思われて長年活動されていること」「人との繋がりやコミュニケーションを大切にされていること」「しょうがいや年齢、立場に関わらず、人を大切にされていること」が、地域貢献活動へと繋がっているのだと感じました。